

「悲しかったけど頑張った飼育」 西東京市立保谷第2小学校 4年

ぼくは、飼育をやり始めた時は、「飼育って、面白いかな」なんてことを考えていたり、「戦わせられるかなあ」なんてとんでもないことを考えていました。本当に最初のころは、「つつかれないかな」とか、思っていたもんだからうかつに餌もあげられなかったです。それに、まだそうじとかの細かいやり方も分からなかったから、むずかしくてたまらなかったです。

そして、ぼくがだんだんなれてきたころに、前から具合が悪かったチャボのシルフィーがたおれました。その時は国語の時間で、それを副校長先生が見つけたそうです。ぼくはその時、別の場所で別の事をしていて、池尾先生に教えてもらうまで全然気付かなくて、「えっ本当」という気持ちで教室に行きました。教室についてみると、みんなしいんとしていて、

「シルフィーがんばれ」

と応援したけど、シルフィーは息も少ししかしていなくて、今にも死にそうでした。でもぼくたちは、ただいのりしか出来なくてほかに何も出来なくて、とても悲しくて、きんちょうして、しかも歯がゆかったです。そして、夫のイエローを連れて来てあまりこう果がなくて、ようやくじゅう医の先生が来て、お水を飲ませたり、砂とう水を飲ませたりしました。結局、じゅう医の先生が動物病院に連れて帰りました。その日は「シルフィーは大丈夫かな」と、考えていてなかなかぬれませんでした。

次の日の朝ちょっと心配しながら学校に行った。そして二時間目あたりに副校長先生が、

「シルフィーが元気になりましたよ」

と、言いに来ました。ぼくはその言葉で思わず飛び上がりました。その時は心そこうれしかったです。その日中は、もううれしくてたまりませんでした。

でも、それから数日後、とても悲しいお知らせが入りました。なんとシルフィーの病気が悪化し、シルフィーが亡くなったのです。そのことを聞いた時は、悲しさのあまり、ただぼうぜんとしていて、約十秒後ぐらいにはっとしました。「シルフィーは苦しみながら良くがんばった」とか、「なんでシルフィーは今までずっとがまんしたんだろう。そうか、ぼくたちや家族に希望をあたえてくれていたんだ。ありがとう」そんなことがぼくの脳をよぎります。そして、獣医さんは、

「君たちのせいじゃないよ」

と、言ってくれたのでとてもうれしかったです。そして、シルフィーがなっていた病気は人間の病気と言うと、はいがんだったそうです。ぼくはそんな病気にシルフィーはなっていたんだな、と思いました。そして、そのシルフィーのはいの写真をみると、なんと白いできものが沢山できていて、はいの周りをおおっていました。そして、シルフィーのレントゲン写真を見てみるとほとんど空間がなくて、これじゃあ息をするのも大変だな、と思いました。そして、死んだシルフィーの胃ぶくろ辺りをさわると、何も入っていませんでした。多分だけど、息をするのでせい一杯でエサを食べるのも大変だったんだと思います。

今は、シルフィーやウサギのラバが亡くなった事もあり、エサの量や水の量、掃除の仕方や体調チェックに気を使っています。最初のころとくらべてはるかに動物達にもなれ、好きなエサなど分からなかった事が分かって来て、そしてそれを人に伝えられるようになりました。そして、何よりも変わったのが動物に対する気持ちです。最初はきょうみ本位でやっていたのが、今では「もう絶対これ以上他の子達をなくならせないぞ」とか、「責任を持ってやるぞ」という気持ちに変わっています。これからも飼育を頑張りたいです。

「『命』を見ること」 西東京市立保谷第2小学校 4年

4年生になって飼育が始まった時、きっとかん単にできるようになると思いました。鳥と熱帯魚を飼ったことがあったし、おばあちゃんの家には、年をとった犬がいたから白内障になったり、その他の病気になったときの様子も見ていたからです。また、犬が死んでしまった時のことも覚えていましたから。

でもそれは「見た」だけだったのです。看病したり世話をしたのはおじいちゃんやおばあちゃんやお母さんだったのです。鳥が死んでしまった時、お母さんはスポイトで水を飲ませて手の中であたためていました。私はそれをドキドキしながら見ていました。

それでは学校の飼育ではどうでしょう。自分がさわって、世話をして体の具合に気をつけて鳥やウサギの病気に気づいてあげなくちゃいけません。目が見えないとすごくこわがりになることがわかりました。わかるのは音とにおいだけだから、動物がこわがる音や声は出さないようにしてあげたいと思いました。今でも、シルフィーやラバがびくびくしていたのを思い出します。人間は怖い時には誰かのそば

にくっついったりするけれど、動物もそういうことをすることがあります。したくてもそこに家族がないことの方が多くて、ウサギなどはかわいそうだと思います。

一年生に動物とのふれあいを教えている時、とても怖がっている女の子がいました。体がかたまって動きませんでした。

「大丈夫だよ」

としか言ってあげられなかったけれど、

「動物の方がこわがっているから、急に羽をバタバタしたり、ウサギもビューンと走り始めたりするんだよ。やさしくしてあげれば大じょうぶ」

と、言ってあげれば良かったと思いました。私も最初はチャボを持っていませんでしたが、やっと持てた時はふわっとあたたかくて、思ったより軽くて少しこわいと思っていたチャボの顔がかわいく見えました。

やっぱり自分がさわって自分が責任を持つと、だんだんかわいと思う気持ちや、思い出して気になったり心配したりする気持ちがわくなぁと思いました。

ただ見るだけでなく自分たちで飼育をすると、「命」をみているんだという気がして、こんなふうにいると動物の気持ちがわかってきました。家で動物を飼う時はもっと私もやらなくちゃと思います。でもそう言う気持ちが強くなると、病気になったり死んだりしたときすごく悲しくなりそうだなぁと思います。

一年生がああ授業のあと、チャボの絵を書きました。ふるえて動けなくて下を向いていた子は、きっとほとんど見ていなかっただろうなと思っていました。でも絵を見てびっくりしました。色も形もチャボそっくりでした。いつも飼育をしている私だってこんなに本物と同じにけるか、あまり自信はありません。私だったら、怖かったりあまり興味がない物は、ついつい見逃してしまいますが、こわくても観察する力があるんだなぁと思いました。

「命を見ると言うことはとても幸せを感じるものだけど、その命の重さはとても大きくて、ずっとつづくと考えてた命が消えてしまう時の悲しみはとても大きい。『命』を見ると言うことは喜びも悲しみも味わったと言うことだと思いました。

「ウサギの気持ちになって」 西東京市立保谷第2小学校 四年

私が初めて飼育小屋に入った時、きれいだなと思いました。入る前はもっときたないと想像していました。でも思ったよりきれいでびっくりしました。動物達もとてもかわいく思いました。ウサギのチャメが目が見えないのを知って、でもこんなに清けつにしてあるのだから気持ちがいいだろうなと思いました。こんなに飼育小屋がきれいだから動物達はどんなに幸せに思っているでしょう。これからどんな飼育小屋になるかとてもドキドキしていました。

飼育をしていて一番心の残った事は、ラバとパンダのけんかの事です。けんかをしたのはおそらく、夕方または夜ではないかという事でした。けんかの原인은パンダがラバとチャメの部屋にしん入してきたので、けんかしたという事です。パンダは耳もとから血が出ていました。ラバは血が出ていなかったけど、そのかわりに毛がぬけていました。チャメはけんかしていないけど、目が見えなくて目の前で何をやっているかと思ひびっくりしてストレスで毛がぬけてしまいました。そして私は思った事があります。ラバは目の見えないチャメを、自分たちの部屋に侵入してきたパンダから守ためにけんかをしたのではないのでしょうか。もちろんけんかはいけない事です。でもチャメを守るために正々堂々とパンダに立ち向かったのはすごいと思います。だって人間ではこんな事はめったに無いことです。そしてチャメも、友達のラバが目の前で何か危険な事にあっいてびっくりして毛がぬけたという事は、それほどラバの事が心配だったのではないのでしょうか。このラバとパンダのけんかをその時飼育当番だった一ぱんと五はんがクラスに報告をしていた時、話しながらNさんがすごく泣いていました。正直私はびっくりしました。その時、実感しました。まだ飼育当番を始めたばかりなのに、動物がけがして泣いたという事はとっても動物に対して愛情があるという事でしょう。この事件を見て、ラバとチャメはとても愛し合っているすてきな最高の大親友だと思いました。もちろんラバとチャメ、本人達もそう思っていることでしょうね。

私は今、飼育を始めたころよりもっと飼育小屋をきれいにしようと思い、努力しています。なぜかという前の4年生(今の五年生)が、飼育をしていた時に飼育小屋をとってもきれいにしてくれたからです。なので、前の4年生に引き続きずっともっと飼育小屋をきれいにして、動物達に住みやすくするためにがんばっていきたいです。時々虫が出たりする飼育小屋、時々すずめがフンを落としてくる飼育小屋、いろんな飼育小屋がありました。もちろん今も飼育小屋のそうじががんばっています。これからも動物達を守っていくため、晴れの日はもちろん雨の日、風の日、雪の日・・・どんなに天気が悪くても、がんばってやっていきたいです。